

クオリアという指標 ーチャーマーズのゾンビ論法をめぐってー

中山惣一郎

映画などで人のように振る舞うロボットや、人らしさを垣間見せるロボットの描写を見ることがある。今後科学技術がさらに発達し、実際に人間と何ら変わらないようなロボットが生まれたときにそれは人と呼べるのか。呼べないのだとすればそれは一体何に起因するものなのかという疑問を出発点に、クオリアと呼ばれる、意識体験に伴う独特の質が人とロボットとを分ける指標になるのではないかと考えた。調べていくとクオリアに関する議論は数多くあり、その中でもゾンビ論法に興味を持った。

ゾンビ論法とは、チャーマーズという哲学者が、物理主義に反論するために提示した思考実験である。物理主義とは、この世の全ては物理的なもので説明し尽くすことができるとする考え方であり、ゾンビ論法は物理主義によって意識という心的なものを説明出来ないことを示した。しかし、ゾンビ論法には反論も多く存在している。クオリアを指標とするためには、クオリアの存在を示す必要があり、ゾンビ論法の妥当性によってクオリアの存在を裏付けるために、本論文では、チャーマーズ自身が想定した反論に対する再反論をまとめ、それらを踏まえた上で新たな反論として佐金の論文を紹介し、これに対する反論を考察とした。

ゾンビ論法を主軸とするため、その背景にあるクオリア議論についてまとめた。クオリア議論は、大きく分けて物理主義と物心二元論という二つの考え方の対立によるものである。それらの説明とクオリアがどういったものであるのかを第2章で説明した。

次に、ゾンビ論法において主題となる意識と言う概念について、チャーマーズ自身がどのように定義しているのかを整理した。その後、チャーマーズの意識定義の理解の助けとするため、ティム・クレインによるネド・ブロックの意識に関する二つの区分の説明を加えた。

それらを受けて、ゾンビ論法について整理し、チャーマーズ自身が想定していた反論とその再反論についてまとめた。それらを踏まえた上で、新たな反論として、佐金の論文を概観した。ゾンビ論法とは、我々人間と意識を持つこと以外がすべて同じゾンビという存在がいる世界を想像できることを基盤として考えられた思考実験である。佐金はこれに対して、ゾンビが意識を完全に持っていないと示すことは不可能だとして、この観点からゾンビ論法とその根本をなす思考可能性論法への反論を行った。

最後の考察では、佐金の言うようにゾンビがゾンビ的意識を持っていたとしてゾンビ論法を再定義したとしても、物理主義に反論するための機能を何も失うことはないという再反論を行った。しかし、この物理主義とは、物的構成や心的機能から一意に意識を決められるような強い物理主義のみであり、全ての物理主義に対応できるような再反論の構築が今後の課題である。

(指導教員 横山幹子)